

## 安政大地震をえがいた 鯰絵解説



### しんよし原大なますゆらひ

遊郭のあった吉原は、明暦大火（1657年）のあと、浅草の水田を埋め立てた軟弱地盤の上に移転されていた。廓のもっともにぎわう夜十時ごろ激震におそわれ、直後の出火により廓内が全焼、遊郭と外を結ぶ橋も落ちて逃げ道が限られたため、630人におよぶ遊女たちが焼死した。この鯰絵では、吉原の遊女や遊客たちが大鯰を捕えて、遊女に仕える幼女は小鯰を捕えて、口々にののしりながら、なぐる、打つ、けるなどして地震のあだ討ちをしている。左上では職人たちがこれを止めようと、とんできている。一方、鯰は「おいらんたちにのられてうれしいよ…、またゆするよ」と喜び、おどけている。このように自然現象である地震に対するやり場のない怒りを、擬人化した地震鯰にぶつけることで、はらしているのである。（東京大学地震研究所 所蔵）

解説文は、「安政大地震鯰絵」（国公立所蔵史料刊行会、1979）と「鯰絵—震災と日本文化」（宮田登・高田衛監修、1995）を引用・参照し、加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博物館）がまとめました。



### おおじしん 生捕りました三度の大地震

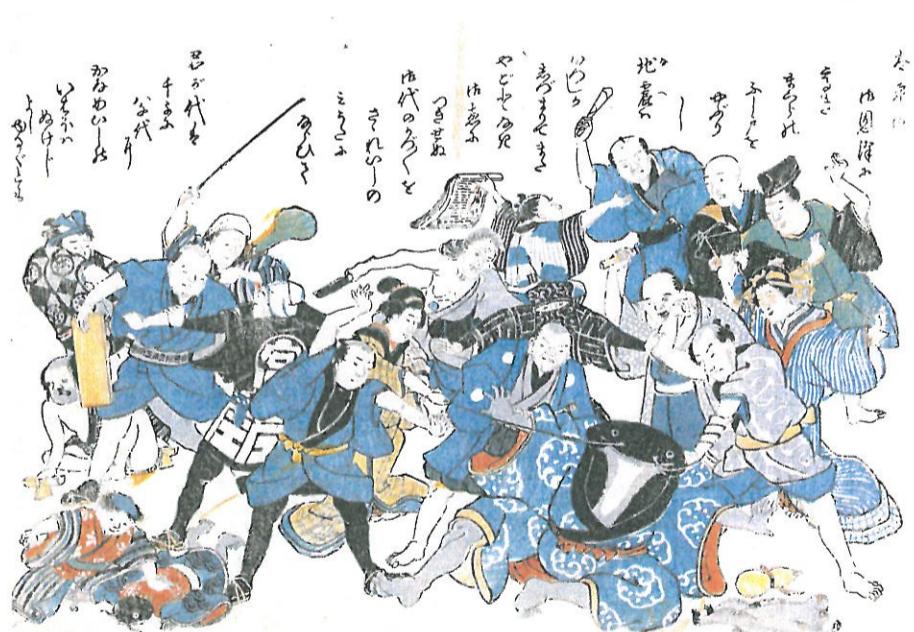
鹿島大神宮の神様が、生捕りにした三匹の鯰をかけ蒲焼屋に連行したところ、地震で儲けた大工、とび職、左官、屋根師、絵師の五人が、どうか助けてやってくれと頼んでいる。三匹の鯰は大きさの順に、善光寺地震（1847年）、安政地震（1855年）、小田原地震（1853年）を表わしている。しかし、職人たちの願いは聞き入れられず、神様は鯰を斬固として許さず、「ふたたび地震がおきないために、なべ焼きにしろ」と命じて幕となる。地震鯰、鹿島大神宮、職人、蒲焼といった画題のほとんどを組み合わせた鯰絵の秀作である。（東京大学地震研究所 所蔵）



### じしん 地震どう化大津ゑぶし

大津絵は、江戸時代の初めに近江国大津で売り出された民衆絵で、無名の画家が画いたものである。民俗信仰や伝説と結びついた戯画や仏画であり、かんたんな筆彩りで、奔放に画かれた。この鯰絵はその画法を写し、瓢箪でおさえつけられた大鯰を中心にいろいろな人々を書き込み、これを大津絵節という節回しで「どう化」して、大工や左官、芸人などの庶民が強く「世直し」を願望していることを表わしている。文中にはしゃれもあり、庶民の気持ちを十分に引きつける力がある。「八方へ燃え…十方にくれます」と生活の途方にくれることにしゃれる。さらに絵中の「祭りの跡で又永やすみ」には、政は後回しで永やすみと、幕府の無為無策ぶりへの痛烈な皮肉がこめられている。

（北淡町教育委員会 所蔵）



### たいへい 太平の御恩沢に

人々が鯰をなぐったり、瓢箪を引っ張ったりしてこらしめている。左下でも子どもが子鯰をこらしめている。一方で、地震で恩恵を受けた職人たちや瓦版売りは鯰をかばっている。鯰の脇には瓢箪がころがり、猿が倒れている。これは猿が瓢箪で鯰をおさえるという大津絵の一つを意識しており、今回の地震は、鯰をおさえているはずの猿が瓢箪の酒を飲み、酔って寝てしまったために起こったということを示している。詞書きもしゃれている。地震を「なへ」と読ませるのは、神代の時代より地震の呼び名であった「なゐ(地)ふる(震)」を受けたもので、それに続くパロディー化した君が代の歌にかけられている。この歌の後半に「かなめいし(要石)の いはほ(巖)ハ ぬけ(抜)じ よし ゆるぐとも」とあり、「搖(ゆ)るぐとも よもや抜けじの要石 鹿島の神のあらんかぎりは」という有名な地震歌をしゃれたものである。

（北淡町教育委員会 所蔵）

### なまづ 鯰の力ばなし

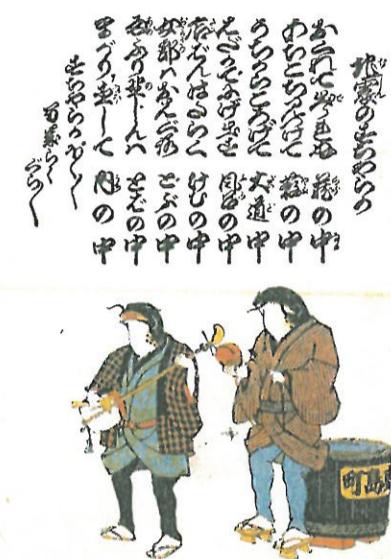
善光寺地震の信州鯰と安政地震の江戸鯰が、鬚を結んで輪を作り、相手の首にかけて首引きをしている。その脇には江戸鯰の女房鯰が描かれている。詞書きは、「なまづの力ばなし」と「なまづの婦夫やきもちはなし」の二話からなり、歌舞伎「伊賀越中大雙六」の六段目をもとにした小説にしたてられている。力ばなしでは、懸念になった江戸鯰と信州鯰が急に首引きを始めたので、女房鯰がびっくりして止めようとするが、二匹ともやめようとせず、「沼津では腹さえ切ったのに鬚が切れるぐらいた」と答えていた。(北淡町教育委員会 所蔵)



### じしん 地震のすちらか

「すちらか」は歌舞伎下座音楽の一つで、幕末から流行した阿呆陀羅經を二味線にのせ、小木魚をいたるものである。鯰にはすちらかによせて衣装や道具が描かれており、背景の防火用の水樽には、鹿島大明神をもじり「鹿島町」の町名が記されている。すちらか節では、「おくれて出られぬ 蔵の中…、はだかでにげ出す 風呂の中…」と地震時に人々の逃げまどを調子よく唄い、続けて「雨ふり野じんぱとばの中、まがりヲ直して 内の中」と地震後の避難生活を風刺している。

(北淡町教育委員会 所蔵)



4



### よなお 世直し鯰の情け

庶民が「地震の時には神馬が駆けめぐり人々を救ったのだ」と言う。そこで鯰が来て、「本当はおれたちの仲間が救ったのだ。地震もおれたちの仕業ではない。おれたちは鯰を悪く言うやつは救わずに、歓迎してくれる人々だけを助けただ」と答える。これを聞いた人々が「鯰にそんな情けがあったのか」と感心すると、鯰は「魚心あれば水心」としゃれ、会話を終わらせている。鯰を庶民の味方として擬人化することで、地震で苦しむ庶民に特別の施策をはからなかかった幕府に対する皮肉を描いた鯰絵である。(東京大学地震研究所 所蔵)

### せつぶくなまづ 切腹鯰

鹿島大明神に矢を放たれて罪をとがめられ、とうとう觀念した地震鯰が切腹して腹の中から黄金を出している。これを見た長者は、「無念をはらそうと来てみれば、自腹をきってわびる鯰の心の殊勝さに、これまでの恨みは晴れた。」とつぶやく。地震で亡くなった死者たちも、「ご隠居のおっしゃることも、もっともだ」と、切腹鯰を許している。こらしめられた鯰が許される立場になったことに、この鯰絵に巧みに盛り込まれた震災後の刻々と動く世情を読み取ることができよう。

(東京大学地震研究所 所蔵)



5



### なまづ かしまだいみょうじん 鯰と鹿島大明神の首引き

向かい合う二人が輪にした縄を首にかけ、互いに後ろにそり返って引き合う力比べを「首引き」という。この鯰絵では鹿島大明神と鯰が首引きをしており、鯰が勝つと地震が起こることを表わしている。鹿島大明神には多大な被害を受けた金持ちや芸人たちが、鯰には地震で儲けた職人や絵師たちがつき、それぞれに応援をくりひろげている。職人たちは鯰に負けてくれるなどしながらも、「もう少しやんわりとやんなせえ、またうごくとこまりやすぜ」と、地震はもうこりごりだと言う。鹿島の神様は、「おれが出雲に出ているとこの始末だ。以後のみせしめを觀念しろ」と言い、首に力をこめる。対する鯰は、「どっこい、そとはうまくいきませんよ。わしもぬらくらしねえように焼け場で灰をつけてきた」としゃれる。絵の口上は、今回の地震は仏説の帝釈動という大吉のしるしで、鯰をときはなして藏をゆりくずし、金銀を庶民にあたえたという意味である。(東京大学地震研究所 所蔵)



### じしん 地震・雷・過事・親父

地震・雷・過事(火事)・親父は、古くから言い伝えられた恐いものの代表である。この鯰絵は、地震を表わす町人風の鯰、鬼の姿の雷、職人風の火事を擬人化し、走る前にした三人の話のやりとりを絵柄にしている。また鯰絵の最大の購買者である親父の顔を立て、他の三人の会話だけを浮き彫りにして悪者にしている。三人の会話では、雷が鯰に向かい「この間の大搖れはなんだ」と問う。鯰は「わっちは水の中で火は知らねえ」とうそぶき、さらに「天候が不順で陰陽の気が和順せず、おもしろくないから大ふざけをやるのさ」と地震の発生原因を説明する。さらに火事が「春とまちがえて乱心し、仲間が踊ったり、ひっくりかえると地震になるのか」と問いつめると、鯰は「自分自身でもわからねえ」と言っている。江戸時代の人々が地震と鯰との関係をどのように考え、地震の原因が鯰にあると信じていたことが、この鯰絵からもうかがえる。

(東京大学地震研究所 所蔵)

6